



理性で知るとは

頭で知るのではなく、内在の理性で知る、判断するものだと言っています。(二十頁三行目)ところが、この理性で知るとはどういうことか、これがわからないといけません。

たとえば今、地球の危機、或いはサタンのものがないと言いますが、これを判断するのは頭ではなく理性です。危機であることは大体わかっていても、それは現在の科学でわかる程度のもので、それ以上の危機、地殻変動や地軸移動などは科学では証明できません。ましてサタンの者がいて地球をダメにしようとしているなどわからないのです。みえない、証明できないものをみるのは、人間や地球に愛をもっていないとわかりません。愛がないとわからないのです。

科学的な証拠や三段論法の理屈で考えられないもの、たとえば目にもえない靈魂の存在を信じるのは大変難しいことです。みえないものをむやみに信じると盲信に陥ってしまうから、証明されないものは一切信じない、というのは知的なき方のように思いますが、しかし、人間の目にも見えるものだけが存在する、その他は存在しない、と考えるのは非常に尊大な考え方です。宇宙人の問題でもそうです。この広い宇宙に地球という惑星だけに人間がいて、他の惑星には人間はいないとなぜ断言できるのでしょうか。いるかもしれないと思うのが当然です。いないと断言するのは、まるで昔の天動説と同じで、天の方が動いていると信じて疑わなかった人間中心の尊大な考え方です。やっぱり宇宙人はいるかもしれない、人間以上のものもいるかもしれない、又目にもえない霊も存在するかもしれない、目にもえない神も存在するかもしれない、そこま

ではふつうの良識ある人は考えなければならぬのです。それ以上、霊はいるとか神はいる、或いは宇宙人の存在ということはそれ以上の判断を要する問題になってきます。その判断は、愛があると考えざるを得なくなつて、真剣に考え悩み、その結果、今の地球の危機がわかり、その救う方法を考えていくと、そこから神を認めたり霊を認めたり、宇宙人の存在を認めたりというところへ発展していくのです。そして地球を滅ぼそうとしているサタンの代理人の存在も認めざるを得なくなるのです。これらは良識と愛があれば考えられる問題なのです。これが理性で考えるということなのです。

つまり理性で知るとは霊の目で知ることです。霊というのは私達の内部にある神の分身です。だから霊の目で物を見るとは内在の神性が発現することです。それにはギリギリの愛がないとそうはならないのです。

それはスピリチュアリズムの原理がはっきり言っています。

人間は神の分身であるスピリット（靈）を内部にもっていますが、これは肉体にくるまれ隠されています。靈の目で物を見るには、隠されている内在の神性を外に発揮しないといけないのです。隠れたままの靈の目はふさがれているので、内在の神性は絶対外に発現しないといけないのです。

理性の媒体とは靈体ですが、この靈体という媒体が発達しないと、理性の目は全くみえません。靈体が発達させるには、要するに内在のスピリットを発現すればよいのです。一度も人を愛したことのない人の靈体は、風船みたいに中が空っぽです。要するに愛（スピリット）を発現したことがないからです。愛を発現する毎に、靈体に愛の丸マークがつけられます。ということは靈体が発達したということです。内在の神性が

霊体に現れて、霊体そのものが光りはじめたということです。言いかえると、神の霊が霊体に映ってきて影響を現わし、霊体そのものを成長させたということです。そしてその成長に合わせて、すばらしい波動を発しはじめます。つまり内在の神性の性質を霊体が持ち、その分だけ美しい波動をだしているのです。だからこの人には理性の目でもってみえるのです。霊体の発達していない人には、いくら真理を教えても、自分の霊体が真理と同じ波動をもっていないからわからないのです。真理と調だけるだけの波動をもっている人には、波動が同調するので、チャンネルがパチツと合うと映像も声もでるし、意味がわかるのです。だから悟る、知るということは、気づくことです。気づくということはすべてスピリットで悟ること、霊体で悟ることです。だから頭で覚えたものは真理じゃないのです、忘れるものです。霊体からでた波動でもってとら

えたものが自分のものになるのです。だから真理をしるには、霊体が成長していないと、それをとらえるだけの波動がでていないのでダメなのです。霊体の成長は愛と奉仕です。スピリットは愛ですから、そうでないとは成長しないのです。

もう一つ霊体を成長させる方法は、欲得を排して真善美を追求することです。たとえば学者が、立身出世や金もうけを度外視して真理のために真理を追求したり、芸術家が名声や金もうけを考えずに、いいものを創造したくて美を追求するなどは、これも内在の神性の発露ですから霊体が発達します。但し、よく言われるように、自分を立派にすれば世の中は救えるのだといういき方では駄目です。それは一種のおごりです。そうではなくて、ただただ世の中に貢献したいから、或いは真理のために真理を追求するということです。